関根要太郎の建築作品について

ー 秩父宮殿下台臨記念館に関する研究１ー

Keywords
関根要太郎　秩父宮　三峯神社
近代和風　　御用邸　埼玉

AK14077　土屋　春奈

1.　はじめに

1.1　研究背景・目的

老朽化などにより取り壊されることが多い近代和風建築について、その文化的価値を評価し保存するために当研究室では2013年度から積極的に調査活動を行ってきた。

その中で、今回取り上げる秩父宮殿下台臨記念館（**写真1**）は埼玉県秩父市にある三峯神社境内にあり、主に大正・昭和初期に活躍した建築家関根要太郎により設計された。現在非公開となっているこの建物は、宮内庁所管の御用邸や別邸と異なり神社所有の施設でありながら宮殿建築の構成をとった間取りである一方、玄関からベランダにかけて山荘風意匠を持ち、非常に特徴的である。

本研究は、今後の保存活用のために特に設計者である関根要太郎を追い、秩父宮殿下台臨記念館（以下、記念館）の歴史的価値を明らかにする事を目的とする。

1.2　研究方法

①記念館の実測調査を行い、現状を把握する
②現存する皇族の御用邸や他施設として利用されている元御用邸を調査し比較考察を行った上で、記念館の建築的特徴を明らかにする
③記念館建設時の時代背景や建築家関根要太郎に関する文献を調査し、記念館の近代和風建築としての位置付けを行う

1.3　実測調査

【調査対象】
秩父宮殿下台臨記念館
【調査日時】
2017/08/09 ー 08/10 , 11/09,12/21
【所在地】埼玉県秩父市三峰

写真1　秩父宮殿下台臨記念館

2.　調査対象の概要

2.1　三峯神社について[1)]

三峯神社（**図 1**）は埼玉県秩父市三峰山にある神社で、海抜 1,100 メートルの位置にある。主に伊弉諾尊（いざなぎのみこと）・伊弉冊尊（いざなみのみこと）を祀っている。

三峯神社が所有する文化財としては、三峯神社本殿（県指定有形文化財）、三峯日鑑（県指定有形文化財）、三峯神領民家（市指定有形文化財）がある。

2.2　秩父宮殿下台臨記念館の歴史[2)]

記念館（**図2**）は大正14年5月11日に秩父宮雍仁親王（1902-1953）が三峰山を登山した事を記念し、三峯神社によりつくられたものである。秩父宮雍仁親王は大正天皇の第二皇子であり、スポーツの宮と言われる程運動を愛する人であった。

登山したその日に記念館建設を決定し、昭和3年6月1日に地鎮祭、昭和6年8月25日に落成式を挙げた。

設計者は関根要太郎。施工者は丸岡工務店。

構造形式は木造平屋建、寄棟造（一部方形屋根）、鉄板瓦棒葺で総檜造りある。

記念館は居室から奥秩父連峰が眺められるよう境内の入口にあたる三ツ鳥居のすぐそばに配置されている。寝室や居室は和室、玄関にあたる廣間と食堂・談話室は洋室となっている。

建設後である昭和8年8月15日に秩父宮は妃殿下と共に埼玉県秩父地方へ出掛け、その際に約6日程宿泊された。その後は昭和58年に勢津子妃が最後に宿泊されるまで何度か利用され、平成7年の勢津子妃薨去後は年に数回迎賓のために使用する程度である。

終戦後の昭和22年からは一室を「三峯宝物館」として宮家御下賜品を来山者に広く公開する目的で利用していたが、老朽化や施設の構造上展示が不向きである等の理由により5年で閉館し、現在非公開となっている。

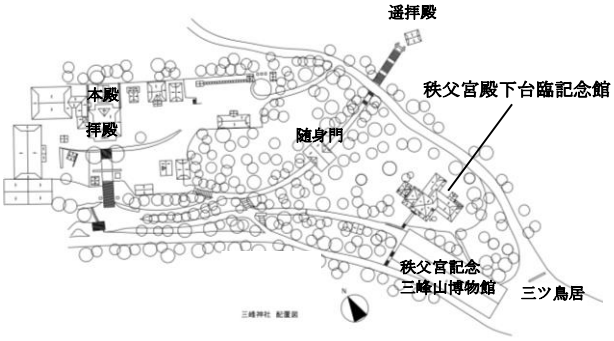

図1　三峯神社　境内配置図

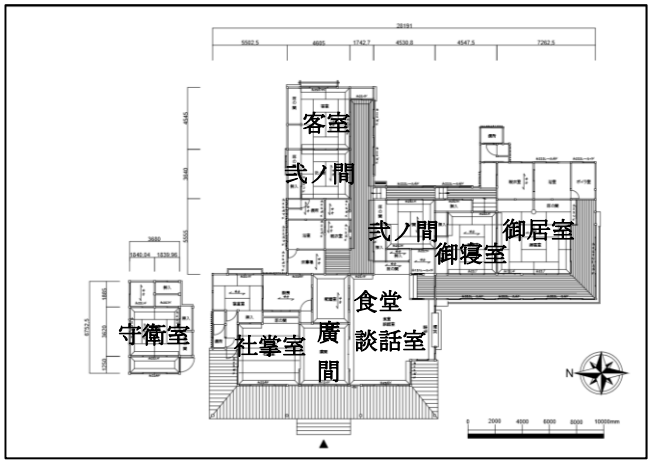

図2　秩父宮殿下台臨記念館　現状平面図

3.　建築家関根要太郎について

3.1　生い立ち[3) 7)]

写真2　関根要太郎

関根要太郎（**写真2**）は1889年に埼玉県秩父で生まれ、幼少期は秩父市で育った。三橋四郎設計事務所で働いたのち、東京高等工業学校（現、東京工業大学）に入学。卒業後は不動貯金銀行（りそな銀行の前身）の店舗設計などに携わったのち、実の弟である山中節治と共に関根建築事務所を大正9年開設。事務所には三橋四郎設計事務所時代後輩であった蔵田周忠などが所属していた。1959年、風邪を悪化させた事が原因で持病の心臓疾患により逝去。

3.2　主な作品[3) 4)]

関根の主な作風はユーゲントシュティールというアールヌーボーの影響を受けたゼツェッシオンで、主にドイツで隆盛したものである。直線的な部分が比較的少なく、屋根や壁、細かい彫刻にロマネスク風の独特な曲線と曲面をもつものが多い。

関根の現存する主な作品の一覧（**表 1**）である。特に函館海産商同業組合事務所（**写真 3**）と百十三銀行本店（**写真 4**）は函館市景観形成指定建造物、亀井喜一郎邸（**写真 5**）は函館市伝統的建造物、旧多摩聖蹟記念館（**写真 6**）は多摩市指定文化財に指定されている。

写真3（左上）
函館海産商同業組合事務所

写真4（右上）
百十三銀行本店
写真5（左下）
亀井喜一郎邸
写真6（右下）
旧多摩聖蹟記念館

表1　関根建築事務所の主な現存作品[6)]

建物名	建設年	所在地	用途	構造	施工者
函館海産商同業組合事務所	大正9年（1920）	北海道函館市	オフィスビル	木造モルタル塗り3階建	村木甚三郎, 村木喜三郎
亀井喜一郎邸	大正10年（1921）	北海道函館市	鷲見家所有建物	木造モルタル塗り2階建	不詳
六華倶楽部	大正13年（1924）	解体保存中	皇室専用スキーロッジ	木造2階建, 一部石造	福島市の大工
百十三銀行本店	大正15年（1926）	北海道函館市	SEC 電算センタービル	SR 造 3 階建, 一部3階	木田保造
村林ビル	昭和3年（1928）	東京都江東区	佐賀町スタジオ	SR 造 3 階建	大林組
旧多摩聖蹟記念館	昭和5年（1930）	東京都多摩市	展示ギャラリー	SR 造 1 階建	大倉土木株式会社
不動貯金銀行七条支店	昭和5年（1930）	京都府京都市	京都中央信用金庫本部別館	SR 造 2 階建	藤木工務店大阪本店
秩父宮殿下台臨記念館	昭和6年（1931）	埼玉県秩父市三峰	非公開	木造平屋建	丸岡工務店
不動貯金銀行下関支店	昭和9年（1934）	山口県下関市	中国労働金庫下関支店	SR 造 2 階建	籠寅組

3.3　秩父宮殿下台臨記念館設計経緯[2)5)]

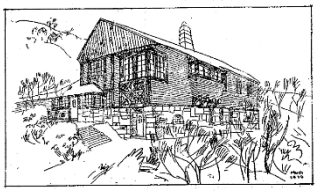

図3　六華倶楽部

関根要太郎は大正13年、山形県米沢市にある五色温泉宗川旅館の敷地に六華倶楽部（**図3**）という会員制施設を皇族のためのスキーロッジとして建設した。これは関根が同倶楽部の会員であったために依頼された。関根と秩父宮雍仁親王は六華倶楽部で親しくなり、三峰山登頂の際に関根は同行することになった。これが契機となり記念館設計を関根が受け持つこととなった。

4.　調査結果

4.1　実測調査について

今年度の調査により、内部状況が建設当時からあまり変更されず調度品等も当初のものが多く残っている事、玄関正面に真っ直ぐなアプローチがある事などが分かった。また、風呂場の外壁に唐破風のようなデザインが使用されていることなども判明した。

4.2　建設当初との比較

建設された翌年の昭和7年に雑誌に掲載された記念館平面図（**図4**）と現状平面図（**図2**）を比較すると、守衛室

が新たに増築されていること、東側便所部分が改築されていることが判明した。

それ以外には特に間取りや室用途に変化はなく、建設当初から大きな変化は見られない。

図4　建設時平面図

5. 秩父宮殿下台臨記念館の意匠について

これまでの実測調査や文献調査から、記念館には以下の特徴が挙げられる。

① 皇族の施設としての宮殿建築的特徴
② 山奥にある建築であり、登山を意識した山荘的特徴
③ 三峯神社境内にあり、神社所有という面からの神社的特徴

5.1 記念館の宮殿建築的特徴について

記念館は秩父宮殿下が三峰山を登山した事を記念し皇族の宿舎として建てられた建築であるため、関根は建設するにあたり皇族の宿舎として遜色ない建築になるよう、当時の御用邸・別邸や邸宅などを参考にしたと考えられる。そこで、関根が活躍した時期に比較的近い木造の御用邸と記念館を比較する。

5.1.1 御用邸について

御用邸とは皇族の別荘である。

現在は葉山御用邸、那須御用邸、須崎御用邸の三施設のみであるが、以前は数多く存在し、その多くは現在記念公園などになっている。

5.1.2 記念館と御用邸の比較

記念館の和室空間は二、三室を一列型に連続して並べ、皇族の利用する御居室と御寝室は段差を設けることで格を上げている。また、室には洋風の照明に床の間と床脇、円窓がある。玄関にあたる廣間と食堂・談話室は洋室となっている。

室と室を連続させ、長い廊下で空間を繋ぐ形式は寝殿造、書院造の時代から脈々と続いてきた宮殿建築の間取りの通りであり、御用邸でも同様の形式になっている。

また、洋室と和室空間を一体化させた間取りは当時洋館を接客など公的な場として利用し、隣接する和館を生活の場とする宮殿・邸宅等の空間構成と共通している。

日光御用邸の食堂と記念館の食堂・談話室を比較すると、どちらも洋室立式で蟻長押や折上格天井があり、つくりが類似している。（**写真 7,8**）

一方で、玄関ファサードのつくりは異なっている。一般的な御用邸の玄関は車寄せがあり屋内に玄関があるが、記念館には車寄せがなく、図面上玄関ではなく廣間が入口にあたるため、入口正面の階段で靴を脱いで入る形式となっている。

写真7　日光御用邸食堂　　写真8　記念館食堂・談話室

5.2 記念館の山荘的特徴について

関根の作品の中でも珍しい木造建築である記念館は、山の上の傾斜地に建っていることからか御居室・御寝室の床下は懸造風の意匠である。

また、暖炉がある事や縁側天井に三角形水平垂木が用いられているところも山荘を意識したデザインと言える。

関根の作品で記念館以外に山荘風意匠を持ち、用途の近い六華倶楽部と比較することで記念館の特徴を捉える。

5.2.1 六華倶楽部について

3.3で説明したように、六華倶楽部は記念館建設の契機となった建物である。皇族が一般の旅館に宿泊することが容易でない時代であったため建設された。デザインについては鹿子木員信が贅沢を嫌い山小屋風を主張している。

皇族専用としては大正13年から昭和20年まで使用され、その後は昭和30年～40年代まで慶應義塾大学OBらが使用。昭和45年以降は漏電の恐れがあるため利用されず、平成11年からは移築・復元のため解体保存されている。

5.2.2 記念館と六華倶楽部の比較

記念館と六華倶楽部を比較した際、類似点は以下の通りである。

ⅰ）どちらも皇族のための施設である
ⅱ）傾斜地に建っている
ⅲ）屋根が瓦棒葺きである
ⅳ）煙突がある
ⅴ）段差による緩やかな空間の繋がりがある
ⅵ）入口は洋式、生活スペースは和式である
ⅶ）居室は竿縁天井である

一方で、記念館は水平性を強調した緩傾斜の屋根を持ち庇が多いが、六華倶楽部は積雪地帯であるためか庇がなく、屋根勾配も比較的大きい。

関根の作品では、木造であってもモルタル塗りなどによってユーゲントシュティールの意匠が前面にでているものが多いが、秩父宮殿下が登山愛好者でありあまり華美なものを好まなかったため、周囲の環境などにも配慮した結果記念館や六華倶楽部は山荘風のデザインとなったと推測できる。

5.3　記念館の神社建築的特徴について

明治時代から始まった神仏分離令は、三峯神社にも例外なく影響を与えた。三峯神社は神仏分離令により境内の寺院施設を排すにあたり、それまで三峯山本堂として観音像を安置していた施設を小教院（現、喫茶店）とし、護摩堂であった施設を国常立神社として使用した。また、旧社務所（現、斎館）は大正天皇即位の礼を記念して大正 12 年に建設されるなど、明治から大正時代にかけて境内の状況は大きく姿を変えたといえる。

そうした流れのある中、大正 14 年に建設が決まった記念館は三峯神社境内に位置し神社が所有する施設という側面から神社建築を意識したデザインを取り込んでいると考えられる。

5.3.1　明治・大正期の神社建築について

明治以前までは神仏習合により一つの境内に神社や寺が混在していたが、明治維新と共に神社らしさとは何かが追求されるようになり、神仏分離令や官国弊社制限図（以下、制限図）を作成するなど、日本の神社建築の在り方や思想は明治を境に大きく変わったといえる。

神仏分離令により神社境内から仏教色を排除し、制限図によって境内の配置や社殿の大きさ、意匠などが制限された。

5.3.2　記念館と神社建築の比較

記念館は玄関正面に真っ直ぐなアプローチがあり、建物の正面にある階段を上って内部に入る形となっている。この形式は参道から拝殿へのつくりを思わせる形であり、制限図の境内配置にもこの形が記載されている。

また記念館の玄関正面は左右対称な庇と柱のスパンによって中心性のある神社風な趣を感じさせる。

図 5 は昭和 7 年に雑誌に載った記念館の立面図の玄関部分である。立面図には玄関中心部分に蟇股のような飾りが描かれている。現在の建物には図面と異なりこの部分に飾りは付いていないが、これは神社建築を意識したデザインではないかと推測できる。

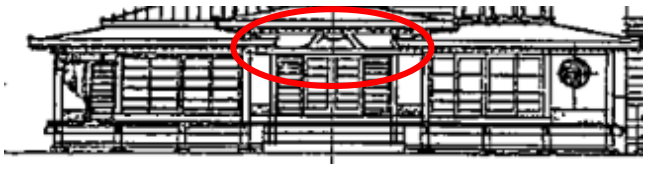

図 5　建設時立面図（玄関部分）

更に記念館平面図をみると、玄関正面部分に縁側があるが、玄関位置に縁側を配することで神社の高欄と似たファサードを演出していると考えられる。（**図 6,7**）

一般的に邸宅の入口に縁側のあるつくりは珍しく、また関根の設計したいくつかの邸宅建築にも記念館のように縁側中心から入るデザインは見られない。**5.1.2** より宮殿建築にもあまり見られないファサードであることから、神社建築を意識していると考えられる。

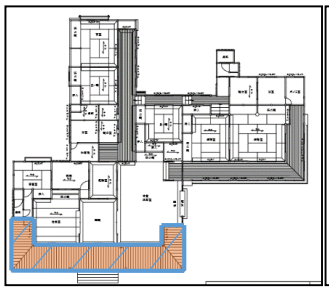

図 6　記念館平面図

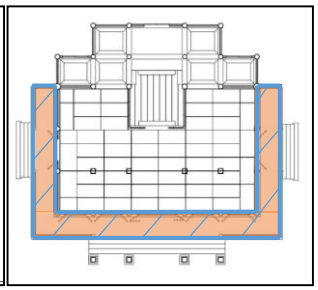

図 7　三峯神社拝殿平面図

5.3.3　記念館と秩父宮雍仁親王

記念館が神社建築的要素を持つ理由は神社境内にあるためだけでなく、皇族が利用する施設であることも要因の一つであると考えられる。**写真9**は秩父宮同妃殿下が三峯神社に来訪した昭和8年に記念館正面で神子舞を行っている写真である。このような行事の必要性から記念館は廣間の隣室に社掌室を設け、来訪時には玄関前で祭事を行えるよう神社建築的ファサードを計画したと考えられる。

写真9　神子舞

6.　まとめ

記念館は今まで山荘風で緩傾斜の寄棟屋根がモダンなフランク＝ロイド＝ライト的意匠が注目されていたが、神社境内にある事や皇族施設という側面の影響もあり、特徴的な意匠を持つ近代和風建築であることが明らかとなった。関根要太郎の作品の中でも珍しい木造建築である記念館を保存していく事が、近代和風建築史上とても重要であると感じている。

参考文献

1) 秩父宮記念博物館(1976)『秩父宮記念三峯山博物館要覧』,大塚巧藝社.
2) 關根要太郎(1932)「秩父宮殿下三峯山御登山記念館に就て」,『日本建築士』1932年5月号，日本建築士會.
3) 近江栄・堀勇良(1981)『日本の建築「明治大正昭和」10日本のモダニズム』,三省堂.
4) 蔵田周忠(1950)「ウィーンの「ゼツェッシオン」とドイツの「ユーゲントシュティール」」,『新建築』1950年25巻11号,pp.8-18,新建築社.
5) 關根建築事務所(1925)「スキー家の宿」,『建築画報』1925年16巻，建築画報.
6) 永井義浩(1998)「建築家・関根要太郎(1889~1959)」,『日本建築学会北海道支部研究報告書』71,pp581-584,日本建築学会北海道支部.
7) 町田仁志「関根要太郎研究室@はこだて」,〈http://fkaidofudo.exblog.jp/〉2018年1月22日アクセス.